行を二とせず、規矩を本心の外に求めざるにあるか、若し夫の朱子の謹循、一字必ず其安を求め、一事必ず其極を審にすると、陽明の雄放、直に本心を提醒し、六經を將て我を注するとは、二家資性を同ふせざるの致す所、其自得するに及んでは、何ぞ不可あらんや、且つ此彼互に相呼んで支離玩物と爲し、肆行無忌と爲すは、皆流弊を憂ふるの苦心、若し衛道に功ありとせば、其は則ち一のみ、以て二家を軒輊するに足らず、然りと雖、良知の二字を孟子に借りて而も必ずしも其義を同ふせざる、晩年定論を著して而も擇んで其當を得ざる、若くは良知を以て大學の致知を解するの經意に於て穩かならざる、固より陽明の失、たゞ吾人は武承を竢て後之を識らず、却つて此の如きは陽明の陽明たる所以なるを信ずる也、

文　苑

第六回開校紀念會祝詞

吉丸一昌

我學舍の御垣に生ふる村松のみどり、年毎にいよゝさしそひ行きて、其陰は高く空の八雲をさゝへ、其根は深く底つ岩根に至り、小枝には友鶴すくひ、下枝には十かへりの花さき出でゝ、大御國の根ざしとならんものは、此御垣の内よりぞ出でつべき、あなうれしきかな、かくもめでたき我學舍の紀念會にあたり、一言聞えあげて、祝ひまつらでやはある、

天そゝりそゝりたゝせる　あその山やまとし高く

あさ日かけ匂ひ出つれは　友鶴もなきて行くなり
大空のすめるこゝろを　人皆の心になして
幾千年かはる事なき　白川のせゝの白ゆふ
千代かけて喜ひ祝ふ　今日もそれしき。

反歌　ものゝふのおふてふやのゝ一筋に祝ふはけふの足日なりけり

祝紀念會歌

植松厚

たつだやま　峯の常盤木　千代かけて　變らぬ如く
とこしへに　流れも清き　白川の　まさごまじりの
水の面に　影やどせよと　君が代の　深きめぐみに
たてそめし　學びどころは　とし〳〵に　四方よりつどふ
男子々を　いやましつゝぞ　榮えゆく　其こしかたを
忘れぬため　年毎ひらく　紀念會　小春の日影
うらゝかに　いでめるどちは　競ひ合ひ　見むとて來る
人々は　わかきおいたる　いりまじり　庭に去げれる
姫小松　こけのむすまで　盛なる　今日の祝を
去づや賤　賤の緒だまき　くりかへし　末長かれと
萬代を　歌ふ今日こそ　目出度けれ

反歌　樂しさをなにゝたとへん六つとせを重ねて祝ふけふのまとゐの